

「まあ」再考

富 樫 純 一

キーワード：感動詞、まあ、心内処理、不完全さ、演技性

1. 問題の所在

感動詞「まあ」^{*1}にはさまざまな用法が存在している。先行研究ごとに用法の区分や位置付けに差が見られるものの、概ね以下の6種にまとめることができるだろう。なお、名称は本稿筆者が便宜的に付けたものである。

- | | |
|---|----------|
| (1) 参加者は、まあ、50人くらいかな。 | 《曖昧処理用法》 |
| (2) A：論文できた？ B： <u>まあ</u> 、それなりに。 | 《曖昧反应用法》 |
| (3) 日本でリングといたら、 <u>まあ</u> —青森ですよ。 ^{*2} | 《強調用法》 |
| (4) <u>まあ</u> 、 <u>まあ</u> 、落ち着いて。 | 《なだめ用法》 |
| (5) あら、 <u>まあ</u> 、驚いた。 | 《驚き表示用法》 |
| (6) A：やればできるじゃん。 B： <u>まあ</u> ね。 | 《同意用法》 |

(1)(2)は発言の一部や質問への返答に曖昧さが存在することを示している。(3)は対象が一番の存在であると強調している。(4)は相手の行為等の制止、(5)は驚きの感情、(6)は相手の発言への同意をそれぞれ示している。

「まあ」発話直後の情報と密接に関わるのが(1)(2)(3)、直前の文脈状況と直接的に関わるのが(4)(5)(6)であると区別できる。何故「まあ」にはこのように多彩な用法が存在するのだろうか。

本稿では「まあ」の諸研究を踏まえつつ、「まあ」の本質的な意味記述に関する試案を提示する。それは「「まあ」は多様な心内処理における“不完全さ”を表示する」というものである。

2. 「まあ」の先行研究と解決すべきいくつかの課題

「まあ」は感動詞分析の中でも扱われることの多いテーマといえる。先行研究は、「まあ」そのものの意味を捉えようとするもの（認知的アプローチ）と、実例における「まあ」の機能や効果を探ろうとするもの（談話分析的アプローチ）の二つに大別できる。

どちらの立場であれ、「まあ」の基盤となる統一的意味や機能の導出を目指す点は同じである。そして、大半の先行研究においてその結論は概ね一致しており、非明確さや曖昧さといった共通項でまとめることができるだろう。

例えば、川上（1993）の「概言」、加藤（1999）の「とりあえずの反応」、富樫（2002）の「曖昧性」、小出（2009）の「暫定性」、大工原（2010）の「内心のわだかまり」、川田（2010）の「消極的評価」、劉（2021）の「真偽判断の保留」、芦野（2021）の「適切な値として付与できない」といった分析は、用語の違いこそあれ、描き出されている概念は大まかに共通しているといえる。

これは談話分析的アプローチでも同様である。FUKADA（2002）の「談話目標の達成に対して相手の期待を満たさないかもしれない態度」、富阪（2002）の「断定回避表示」、高木・森田（2022）の「相互行為における出来事の問題性」といった記述も、何らかの非明確な要因を「まあ」の相互行為上の使用基盤として捉えており、そこから種々の談話的機能が生じるものとしている。

一方で、非明確さや曖昧さを基盤としない分析も見られる。柳澤・馮（2021）は「優越性を感じた時に出現できる」としており、「まあ」の本質が相手との優越性の差にあると分析している。また、魏（2016）は「待遇レベルが高い」とし、「まあ」を待遇性を帯びた形式と位置付けている。これらは対人関係的な側面を重視しているものである。

また、「まあ」の特殊な用法に注目した研究もある。その代表は大工原（2010）の強調用法であろう。「内心のわだかまりはあるものの、それにこだわらない」という「まあ」の本質的記述をもとに、強調用法を捉えようとしている。

個々の用法分析と関わる先行研究の具体的な問題点については、4節および5節で検討することにし、以下では「まあ」の先行研究を概観した上での、なされるべき課題のいくつかについて示すこととする。

まず、感動詞の本質を巡る問題についてである。談話での使用という観点から感動詞を見ると、談話の展開や参加者に対する影響に注目するのは必然である。そのような機能的側面を分類していく方法は確かに有意義ではあるが、そういった談話志向的な分析が感動詞の本質を捉えているかという疑問が残る^{*3}。逆に、定延・田窪（1995）を嚆矢とする、心内処理の標識として感動詞を捉えよう

とする視点は、感動詞そのものに内在する意味の記述において有効な立場である
と考える。感動詞に内在する本質と、それが談話の中でどのような形（効果）で
顕現するかは、区別されなければならない。

そして、その際に念頭に置く必要があるのが、感動詞使用における演技性、つ
まり「心内処理とは直接的に結びつかない使用」である*⁴。これは用例をもとに
本質や機能を導出する際に大きな足枷となる可能性がある。演技性は話し手が意
識的に発現させる場合もあるし、無意識的に発現してしまう場合もあるだろう。
そのため、感動詞使用の背後にどのような心内処理が存在しているのか、あるい
はどのような機能を有しているのかを、明確な形で捉えることが難しくなるとい
える。逆に言えば、演技性をも包括できるような分析が求められるのではないだ
ろうか。当然「まあ」もその観点で分析すべきものとなる。

次に、「まあ」の意味記述を巡る問題について触れておきたい。「まあ」につ
いては先にも述べたように、統一的記述を試みたものが多数ある。大きくは非明確
さに本質を求めるものと、優越性に求めるものの二つになる*⁵。だが、いずれの
説においても全ての用法を統一的に説明できるような記述には至っていないと思
われる。加えて言うならば、「まあ」の驚き表示用法がないがしろにされる傾向
が強いのも問題であろう。驚きという感情表出や話し手属性の偏りに触れてい
るのみで、驚きが「まあ」の本質とどう関わるのかの説明を試みた研究は富樫
(2002)、芦野 (2021) 等に限られる。

また、金 (2017) や熊切 (2022) が「まあ」の意味として、「プロセスの打ち
切り」といった特徴を挙げている。しかし、これは「何かをするための意図的な
感動詞使用」という目的論的な位置付けとなっている。感動詞の本質は、目的を
達成したいという意図の表出より前段階の心内処理に存在すると考えるため、こ
の分析も効果の側面に注目した記述となっていると見なすことができよう。

3. 「まあ」の本質は何か 一方法論的前提と心内処理の設定一

先行研究から見えてきた課題を踏まえ、本稿での分析の立場を明確にしてお
く。基本的には、富樫 (2002) と同様に「まあ」の本質を心内処理との対応とし
て位置付けることとする。そして、「まあ」のさまざまな用法は全て共通の心内
処理がベースにあって生じるものであると捉える。

その心内処理を求める上で重視されるのはミクロな視点での「まあ」発話であ
る。富樫 (2002) でも指摘した「計算結果の曖昧さ」を例に見てみよう。

(7) 参加者は、まあ、50人くらいかな。

この例で「まあ」が結びついているのは直後の人数を示す情報「50人」のみであろう。この情報が「くらい」という概数を示す表現とともに用いられていることから、情報の出力部分に「概算的でしかないという不都合」が生じていると解釈できる。そして（7）ではそれ以外の解釈が難しいため、概算という心内処理とその出力が「まあ」の背後にあると考えられる。

もう一つ、（8）の例を挙げる。

（8） まあ、まあ、落ち着いて。

この場合、「まあ」発話が直接的に関わっているのは直前の状況（誰かが喧嘩をしている等）であろう。この「まあ」はその状況をどう受け入れる（入れた）のかという情報の入力処理と関わっているといえる。

ここから分かるのは、「まあ」が関わる心内処理に異なる2種類のものが想定できるということである。そこで、以下のように心内処理の概念を細かく規定してみたい。

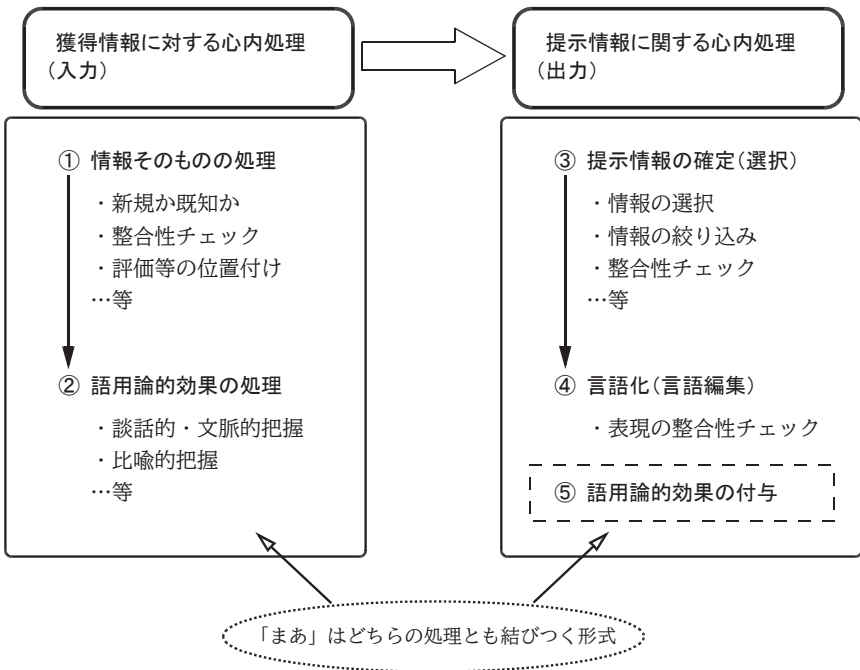


図 心内処理の二段階

図における①は入力（獲得）された情報がどういうものとして心内データベースに格納されるのかという処理、②はその情報が文脈的にどう位置付けられるのかを判断する処理である。③は出力に関わる処理で、情報の選択等が対応している。④は出力情報をどういった形式で言語化するかという編集レベルの処理となる。出力処理には語用論的な効果を付与する処理⑤も設定できる。

この図式のポイントは情報の入力処理と出力処理を区別している点にある。例えば「あっ」や「ふーん」等は獲得情報をどう処理したのかという入力のみに対応した感動詞である。一方、「えーと」「あのー」等は心内のデータベースからどう情報を引き出したのかという出力のみに対応する。それらの感動詞と異なり、「まあ」は入出力両方の処理に対応しているのである。

このことは、劉（2021）による連鎖感動詞^{*6}に関する先駆的な論考によっても補強できる。劉（2021）では「まあ」を真偽判断の処理に属する感動詞としてしている。この「まあ」は他の感動詞群と異なり、連鎖の前項にも後項にも現れうるという、出現位置の自由さがあると指摘している。「まあ」が両段階の心内処理にまたがった形で対応していることの傍証となろう。

そして本稿では、「まあ」はこの入出力処理段階のいずれかにおいて「不完全さ」を伴う処理が行われたことを示す、と規定する。（7）で言えば概算という不完全な出力、（8）で言えば不完全な状況把握である。入力・出力処理の両面に目を向けることで用法の統一的な説明が可能となるのである。

次節では不完全さという心内処理の概念にもとづき、各用法の分析・説明を試みていく。

4. 「まあ」の各用法と本質的意味との関連

4.1. 曖昧処理用法の「まあ」

まず、提示情報に曖昧さがあることを示す用法を見ていく。先行研究は第2節で取り上げたのでここでは割愛するが、概ね非明確さのような概念で捉えようとしている点は共通である。例を見てみよう。

（9）参加者は、まあ、50人くらいかな。

（10）アジェンダ、まあ、議題みたいな感じですね。

二つの例はいずれも提示情報の処理と関わっている。（9）は「50人」、（10）は「課題」という情報に関しての処理が「まあ」と対応している。

（9）の場合は「参加者の人数」という情報そのものの導出において不完全な

処理がなされたことを「まあ」が示している。そして不完全なまま「50人くらい」という概数が出力されている。「くらい」がなくとも、「まあ」によって概数解釈が可能なので、「まあ」そのものが不完全な処理を示しているといえるだろう。

(10) では、いわゆる言語編集的な処理が認められる。ある情報をどのような表現形式で提示するかというものである。(10) では「他の言い方もあるかもしれないが」という前置きのニュアンスが読み取れる。つまり、不完全な言語化であることを示しているのである。(9)(10) は心内での③ないし④の処理と対応していると説明できる。

ただし、「まあ」が発話頭に現れた場合、対応する処理が不明瞭になる。

(11) まあ、参加者は50人くらいかな。

(11) では、どの処理の不完全さに対応しているのか判別が困難である。情報全体の不完全さ(話題提示そのものの曖昧さ)とも解釈できるし、(9)と同様に「50人」という情報のみの不完全さともいえる。さらには「参加者」なのか「出席者」なのかといった、言語編集レベルでの不完全さかもしれない*7。

おそらくこの点が先行研究においてばらつきのある解釈が導出された要因なのではないだろうか。作例にしても実例にしても、「まあ」が何を示しているのかの判別が人によって変わる可能性が否定できない。見方を変えれば、この点が「まあ」の多様な処理との結びつきを表しているともいえるだろう。とは言え、どの解釈であっても「まあ」の不完全さという本質は動かないと考えられる。

用例解釈の難しさについて、語順が関わる例を挙げておこう。

(12) まあ、だいたい、50人くらいかな。

(13) だいたい、まあ、50人くらいかな。

(12) は「だいたい50人くらい」がひとまとまりの概算的な情報として表出されていると捉えられる。「まあ」発話の時点で概算(不完全な処理)をしたことをマークしている。

一方、(13) では先に「だいたい」が現れており、その時点で概算は終わっていることになる。その直後に現れる「まあ」は概算処理と直接的に対応しているとは言い難い。(13) の場合、考えられる可能性としては二つある。一つは④の処理との対応である。「くらい」で言うのか「程度」で言うのか他の形式で言うのかといった表現選択に不完全さがあることを示している。もう一つは、いわゆ

る場つなぎの効果を狙った演技性の強い使用である。場つなぎのために、概算処理の意味にマッチする「まあ」が選ばれたとも捉えられる。ただ、どちらの解釈となるのかは判別が困難であろう。

語順の問題に絡んで、発話末に「まあ」が出現できるという大工原（2010）の指摘について補足しておく。（14）は大工原（2010）によれば自然な発話となる。

（14）参加者は50人くらいかな、まあ。

しかしこれまでの説明を踏まえれば、この「まあ」には心内処理との対応を見取ることができない。「50人」という情報が出力された時点で、「まあ」と直接関わる処理は終わっているわけであり、発話末「まあ」は（仮に自然な発話だとしても）演技性にもとづく使用と見なすことができる。よって、この例をもとに「まあ」の本質を求めることは難しいと思われる。

また、高木・森田（2022：77-78）では「まあ」には「逸脱性標識」の用法があるとして以下の実例を挙げている（例は一部抜粋）。

（15）まあ最初12、3名とおもったけどま20名来て実質的には

この例について、「[20名]という具体的かつ正確な数字の前で用いられている」ことから、「何らかの「曖昧性」があるようには思われぬ」と述べ、「相互行為の焦点として「際立たせない」ことを狙ったものである」と説明している。

だが、「まあ」直後の情報に不完全さが無いからといって、「まあ」の不完全さという本質を否定することはできない。「際立たせない」という効果を狙った演技性にもとづく使用と捉えることも可能であり、それは不完全さと共存しうだろう。ある情報の完全な提示は、ある意味、注目される状態につながりやすいといえる。それをあえて回避するために、不完全さが背後にある「まあ」を選び際立たせない効果を狙ったものと解釈すべきであろう*8。

4.2. 曖昧反応用法の「まあ」

これは、相手の発話に対する反応として（主として発話頭に）現れる「まあ」の用法である。川上（1993）の言う「応答型用法」に相当する。

（16）A：論文できた？ B：まあ、それなりに。

（17）A：答え、これで合ってる？ B：まあ、そうだね。

先行研究では、反応（応答）であるため、先行発話や相手との関係性がどういったものかを重視した分析が多い。川上（1993）の「心理的距離を微妙に調節」、高木・森田（2022）の「回避的（曖昧な）応答」といったものが挙げられる。

確かに相手の発話が「まあ」を使用する動機となっはいるが、「まあ」の背後にある心内処理は、直後に出力された提示情報のほうと密接に結びついていると考えたほうがよいだろう。つまり、発話をどう受け止めたかではなく、どう反応するかに注目すべきなのである。(16) で言えば、「できた？」という質問に対して「どのように情報を提示するか」という処理が「まあ」と関わっているのである。ということは、芦野（2021）が指摘するとおり、提示情報の選択が定まっていな、他の可能性も選択肢にあるという前提が存在すると考えてよいだろう。

(16) Bは「それなりに（できている）」という情報提示であるが、完成度の状態をどのように提示するかという点において処理に不完全さが見て取れる。(16) Aの発話は真偽疑問文であり、その応答としては真か偽の二択になるはずである。にもかかわらず、(16) Bではどの程度「できている」のかを示す「それなりに」が「まあ」とともに提示され、自然な発話となっている。曖昧反应用法は相手の発話との対応ではなく、相手の情報を受け止めた上で、どのように情報を提示するのかという処理が優先されているとみるべきだろう。つまり、(16) Bは「真ではあるもののそれは不完全さが残る情報である」ことを示しているのである。(17) も同様に「不完全さが残る情報」＝「答えが違う可能性もある」という処理結果を出力したことを示していると説明できる。

不完全さが付加されにくい(18)のような状況では、「右」という情報提示と「まあ」の相性はあまりよくない。

(18) (車の運転中：運転手A、助手席B)

A：次の道、どっちに曲がるの？ B：??まあ、右だよ。

実質的な選択肢は「右」「左」の二つであり、そこに不完全さを含めた情報を付加する必要性はかなり低いといえる^{*9}。もしこの場面で心理的距離の調節や回避的応答といった効果が認められるのならば、(18) Bも自然さが上がるはずである。が、そこまで許容度が高いとは思えないことから、この「まあ」も情報の出力処理と対応していると捉えられる。

また、(19)のような連鎖感動詞による反応もよく見られる例である。

(19) A：遊びに行っている？ B：ええ、まあ。

(19) Bでは、直接的な応答に当たる「ええ」が先に発話され、「まあ」が後続することで不完全さが残る反応であることを表している。「とりあえず許可するけれども、許可すべきでない何からの疑念も残っている」といった解釈ができるのである。

これらの分析から、曖昧反应用法は曖昧処理用法と心内処理的に大きな差異はないものといえる。話し手の後続発話をどのように提示するのかという処理部分に不完全さがあり、それを「まあ」が示しているのである。

4.3. 強調用法の「まあ」

強調用法の「まあ」は大工原（2010）によって詳細な分析がなされている。例として（20）が挙げられる。「まあ」直後の情報「青森」に焦点が当たり、強い主張をしていると解釈できる。

(20) 日本でリンゴといたら、まあ青森ですよ。

大工原（2010）の分析では、「まあ」の本質を「内心にわだかまりがあるが、それにはこだわらない」と位置付け、強調用法は「こだわらない」という部分により焦点が当たっていると説明している*¹⁰。

ひとまず強調用法においても「内心のわだかまり」が残っているものと捉えておこう（芦野（2021）でも同様の立場を取っている）。そう考えた場合、わだかまりは本稿でいうところの処理の不完全さと捉えることが可能である。（20）の「青森」という情報提示に際して、完全な出力処理が行えたわけではなく、不完全さというわだかまりが残った状態であると捉えると、「心内でこれ以上の結論を導出することが困難」な状態とすることができるのではないだろうか。心内で導出できたもつとも相応しい情報ではあるものの、「もしかしたら自身の知識の外にはそれ以上に相応しい情報があるかもしれない」というわだかまり＝処理の不完全さを認めることができる。

したがって、強調用法には（心内処理段階の③に）不完全な処理があると考えられる。不完全であるが故に、強調以外のニュアンスも含まれており、それが心残りや弁明といった態度として表れるのではないか。その根拠として例を比較してみよう。

(21) 日本でリンゴといたら、断然青森ですよ。

強調用法は（21）のような単純なパラフレーズは難しいと思われる。（21）の

「断然」は、もっとも相応しい情報であることを示すのであるが、そこには強調のニュアンスしか表れない。それと比べると、強調用法の(20)にはそれ以上に相応しい情報があるかもしれないという心残りのニュアンスを読み取ることができる。

(22) ?断然おいしいのは、まあ青森のリンゴですよ。

さらに(22)のように「断然」と「まあ」を併存させると若干の違和感が生じる。「断然」で始まるからにはもっとも相応しい情報の提示であるはずなのに、「まあ」の挿入で微妙な食い違いが感じられる。よって、強調用法の「まあ」には不完全な処理から生じる心残りの含みがあると考えられるのである。

4.4. なだめ用法の「まあ」

次になだめの効果を示す「まあ」を見る。典型的には(23)のような用法である。

(23) まあ、まあ、落ち着いて。

先行研究では、例えば富樫(2002)が「相手の否定的・消極的な態度」、芦野(2021)が「閉塞状況」、高木・森田(2022)が「その場の状況や受け手の事情(問題)」と述べているように、何らかの「受け入れ難い状況」が「まあ」発話の前提として認められるだろう。(23)で言えば、「相手が感情的になっている」「喧嘩をしている」といった、話し手にとって不都合な(起こってほしくない)事態が容易に想定される。この受け入れ難さは、必然的に不完全さという処理と結びつけて考えることができる。

そして、不完全さとなだめをどう結びつけていくのかであるが、ここでは「不完全なま^まにしておくため」という話し手の対処がなだめと見なされる、と規定してみたい。「このまま事態が進展すると、今の私では対処し切れなくなるので、この不完全な状況を維持して下さい」といった投げ掛けとして「まあ」を用いているのである。金(2017)や熊切(2022)が示した「プロセスの制止」の概念は、なだめという観点からの分析ともいえる。

とは言え、「落ち着いて」等の表現をもとに、維持ではなく、不完全さの解消(より「なだめ」という言葉のニュアンスに近い)を意図しているのではないかと考えることもできるだろう。しかし解消という目的は、実質的には「落ち着いて」等の後続発話が担うものであり、「まあ」自体の働きではないと思われる。何故なら、なだめの「まあ」は(24)のように後続発話無しでも成立するからで

ある。

(24) まあ、まあ。

解消を目的とした後続発話はあくまで付加的なものといえる。となると、解消の前段階＝維持が主たる効果となるのではないか。これは(25)のように、なだめ用法の「まあ」は発話末で用いることができないことが証左となる。不完全さの維持と解消の処理順序を踏まれば、当然のことといえる。

(25) ?落ち着いて、まあ。

さらに、なだめ用法は「聞き手志向的」(大工原(2010))であるため、語用論的效果を処理する部分(図の⑤)とも対応している。どちらかと言えば「不完全な状況の把握」は動機付け・きっかけ程度のもに過ぎず、実際には効果を狙った演技性の側面が強くなるといえる。これは、「まあ」の中でもなだめ用法のみが複数回の繰り返しが可能である点が強根拠となる。

(26) まあ、まあ、まあ。／まあ、まあ。／*まあ。

仮になだめの「まあ」が何らかの心内処理と対応しているのであれば、不完全な状況の把握という一回の処理と結びつくので、「まあ」も一回限りの発話となるはずである。そうならず繰り返しが可能(むしろ繰り返しのほうがなだめとして効果的)であるのは、なだめという効果の上乗せを優先した演技的使用だからと考えることができよう。

4.5. 驚き表示用法の「まあ」

「まあ」に関する論考は多いものの、意外なことに驚きを示す「まあ」について分析しているものは少ない。富樫(2002)が「はっきりとした事実として受け止めない」ことから、芦野(2021)が「認識不可能な事態」であるため、それぞれ驚きという感情表出がなされると指摘しているくらいである。

また、驚きを示す「まあ」は、「上品な女性」(大工原(2010))、「年長女性」(柳澤・馮(2021))というように女性属性の使用に偏りやすいという傾向もある。(27)が典型的な驚き表示用法の「まあ」である。

(27) あら、まあ、驚いた。／まあ、素敵。／まあ！

さて、驚き表示用法の「まあ」は不完全さという本質とどのようにつながってくるのだろうか。まず、注目するのは連鎖感動詞としての親和性である。驚き表示用法の「まあ」は、「あら」「おや」といった感動詞と連鎖を起しやす^{*11}。田窪・金水（1997：268）によれば「あら」や「おや」は、「[驚き・意外]のプロセスに引き続いて、新たに登録した事態に対する評価が下された」ことを示す感動詞である。つまり、獲得情報の意外性が前提条件として存在しており、連鎖する「まあ」においても「意外性を前提とした驚き」があると考えられる。

意外性のある情報とはすなわち心内（処理段階の①）で不完全にしか処理できなかった情報となる。そして、連鎖感動詞「あらまあ」においては、眼前の状況や自身の感情を描写するものが後続しやすい。

(28) あらまあ、雨だわ。／あらまあ、大変。／あらまあ、どうしましょ。

(28)の後続発話には、「現状の把握にとどまっており、対処の段階にまで至っていない」というある種の不完全さを読み取ることができる。このことは、(29)のように対処をはっきりと表明する表現が後続しにくいことが傍証となる。

(29) ??あらまあ、片付けましょ。／??あらまあ、こうしましょ。

よって、驚き表示用法の「まあ」でも連鎖する感動詞や後続要素との関わりから不完全さを見出すことができるのである。

一方で、「まあ、素敵」のように後続要素に評価が現れる場合がある。ただ、評価と連鎖感動詞との相性は（微妙な内省であるが）違和感があるのではないか。どちらかと言えば単独（非連鎖）での「まあ」のほうがしっくりくる。

(30) ?あらまあ、素敵。／まあ、素敵。

後続要素に評価が現れるということは、獲得情報に対する意外性の処理は既に終わっており、その後の評価に関する処理が行われた結果と捉えられる。その点では、驚き表示用法の「まあ」は田窪・金水（1997）が指摘するとおり「驚き・意外」のプロセスと事態に対する評価の両方を表示しているといえるだろう。

ただし、不完全さという本質と結びついているのは連鎖感動詞「あらまあ」のほうであり、単独（非連鎖）の「まあ」は不完全さの意味合いが捨象された（薄められた）驚き表出専用の形式として成立しているのではないかと思われる。

では、驚き表示用法の「まあ」は何故女性属性に偏りやすいのだろうか。それ

は男性属性と言語表現の特徴から捉えることができる。男性属性は断定的な表現と結びつきやすい。断定にはある種の完全さのニュアンスが含まれるとってよい。そこを逆に捉えて、不完全さの「まあ」＝女性属性と派生していったのではないか。その特徴は本質から離れた表現ほど顕著になる（単独（非連鎖）の「まあ、素敵」タイプ）。連鎖感動詞では本質との結びつきがまだ残っているため、連鎖する感動詞によっては女性属性にそれほど偏ることはない。

(31) おやまあ、大変だ。

(31) の「おや」と連鎖した「おやまあ」には女性属性への偏りはなさそうである。驚き表示用法は常に女性属性である、といった強固な結びつきがあるとは言いきれないだろう。

4.6. 同意用法の「まあ」

最後に同意用法と呼ぶ「まあ」を見ていく。

(32) A：やればできるじゃん。 B：まあね。

(32) のような、相手の発話内容に対する同意を示す用法である。この場合、発話内容をどのように入力処理したのか（心内処理①ないし②）が関わっている。

同意用法の「まあ」の特徴として、終助詞「ね」もしくは「な」がほぼ必須である点がまず挙げられる。終助詞が付加されない形（(33)）だと、曖昧反応用法との区別が付きにくい。同意を殊更に示すためには終助詞が必須となる。

(33) A：やればできるじゃん。 B：まあ。

この「ね」および「な」は、聞き手目当て性よりも自己確認的な意味合いが強いと思われる。「まあ」の本質と併せて考えれば、「不完全な処理で終わらせることの確認表明」とでも言えようか。そして、出力処理までの時間が長いほど「まあ（ね）」が示す不完全さの度合いが大きくなり、結果として、同意のニュアンスが弱くなる。

(34) A：やればできるじゃん。 B：……まあね。

(34) では相手の褒めに対して、自分ではそう思っていないため、その処理に手

間取り（沈黙部分）、結果的に不完全なまま受け入れたと解釈できる。川上（1993）の「消極的同意」と同じである。

逆に、沈黙が挟まらなければ積極的な同意の度合いが高くなるのではないか。(32)では「自分もそう思う」という積極的同意のニュアンスを読み取りやすいと思われる。さらには、「まあね」を「ね」を引き延ばした形「まあねー」にすると、積極的同意の度合いがより高まり、自慢げな態度が表出される（(35)）。

(35) A：やればできるじゃん。 B：まあねー。

積極的同意の「まあ（ね）」があることについて、先行研究では取り上げられていない。「まあ（ね）」が消極的、積極的という正反対のニュアンスを持ちうるということは、同意用法の「まあ」そのものにはそういった意味合いが含まれていないことになる。さらに、(36) (37) のように相手の発話がどのような種類であっても「まあ（ね）」で同意することが可能である点も、ニュアンスを捨象した説明の必要性の根拠となる。(36)は同意表明、(37)は否定的評価である。

(36) A：忙しくて大変だね。 B：まあね。

(37) A：あまりいい出来じゃないね。 B：まあね。

したがって、不完全な処理と絡めて考えると、同意用法の「まあ（ね）」は、処理の不完全さとその確認、つまり「不完全さは残るものの、相手の発話内容を受け入れたことの自己確認」という形で説明することができるだろう。消極的といったニュアンスが出やすいのは、「まあ」発話の直前に処理時間の長さを読み込んでしまった結果の（分析者の）解釈なのではないかと思われる。

また、(35)のように引き延ばし形「ねー」にすることで、自己確認の意味合いにより焦点が当たり、不完全さの部分が見えにくくなると、発話内容の受け入れに対して自慢げなニュアンスといったものが表出されやすくなるといえる。

5. 「まあ」の本質と優越性・プロセス制止との関係

本節では、先行研究における「まあ」の多様な分析と本稿での「不完全さ」との関係性について触れてみたい。

4節での分析のとおり、先行研究が示した「とりあえず」「概言」「断定回避」「暫定」といった捉え方は、全て不完全さという心内処理的本質に収束させていくことができるだろう。

さらに以下では、先行研究の重要な指摘といえる「優越性」と「プロセス制止」について考えていく。まず、柳澤・馮（2021）で記述された優越性を取り上げよう。柳澤・馮（2021）では「まあ」が上位者に対して用いにくい、優位な情報を持つ立場だと使いやすいという使用条件を導出し、「まあ」の本質に優越性が存在すると指摘している。しかしその一方で、魏（2016）によれば、「まあ」は目上との会話に出現しやすいという傾向を持つという。そこから「まあ」は待遇レベルが高い形式であると魏（2016）は結論付けている。

この二つの論考は、いわば相反する特徴を持つものとして「まあ」を記述している。どちらにも論理的道筋に瑕疵がないとするならば、双方の特徴とも「まあ」が有するといえるのではないか。不完全さという本質から、「不完全で曖昧な評価が可能である立場」という話し手の特徴を導き出すことが可能だからである。曖昧な評価で済ませることができるのは、通常であれば上位の立場の人間ということになる。上位＝優位となり、話し手が限定されやすくなるのである。逆の見方もでき、相手に気を遣い、評価を断定できない曖昧な状態と解釈すると、魏（2016）の言う待遇の高さにもつながっていくのである。

つまり、「まあ」が持つと考えられる相反する特徴は、同じような語用論的派生であるといえる。優越性を持つから「まあ」が使えるのではなく、「まあ」を使ったら優越性が顕現しやすくなり、話し手の立場を解釈しやすくなるだけなのである。

次に、金（2017）や熊切（2022）が提案したプロセス制止の機能について考えてみよう。両者の論考は、話し手や相手の発話プロセスを一旦止めることが「まあ」の基本であるという立場である。しかし、この記述は「プロセスを止めるための使用」という目的論的なものとなっており、これを本質とするのは疑問が残る。感動詞は心内処理をモニターするのが基盤であると考えられるので、目的論的な記述の背後につながる本質があるはずである。

そこで、「プロセスを制止しなければならぬ」状況が何故発生したのかに注目すると、やはり心内処理の不完全さを見て取ることができるだろう。処理が不完全なままでは、談話展開も不完全・不明確になる危険性があり、それが「一旦止めて対処する（させる）」という意図とつながる。

また、プロセス制止の典型として、話題転換で用いられる「まあ」がある。

(38) まあ、そういうことで。この話は終わりにしましょう。

(39) まあ、いいじゃないですか、その話は。

いずれも話題を打ち切って、別の話題へ転換したり談話そのものを終了したりす

る意志を表明する箇所で「まあ」を用いている。これは、川上（1994）では「転換予告表示」、伊藤（2014）では「断絶をマークする」、熊切（2022）では「談話の転換」と呼ばれている。これもまた、それまで続いてきた話題を不完全なままで処理したことを表明していると説明できるだろう。明確な結論やまとめをしないまま、話題を終了させようとするのである。不完全さが残っている状態であるため、以降の談話展開に何らかの不都合が生じる可能性がある。その予告的表示として「まあ」を明示し、不完全なままで維持することを提案していると考えられる。

したがって、なだめ用法と同じ捉え方が成り立つ。より直接的に相手の行為そのものを志向するとなだめ用法となり、直前の話題のほうに注目すると転換用法となるのではないだろうか。

6. おわりに

広範囲に亘る「まあ」の用法を不完全さという本質によって統一的に説明でき、さまざまな効果との関係も捉えることができたといえる。

今回分類した6種の用法は便宜的なものであり、事例においては用法や効果が複層的になっている可能性もある。その点は注意を払う必要があるだろう。また、音声・イントネーションの側面の検討がまだ不十分であると言わざるを得ない。何故強調用法や驚き表示用法が特殊なイントネーションでなければならないのか、といった問題は今後綿密に検討されなければならない。

注

- *1 本稿では特に明示しない限り、イントネーションの差異やモーラ数の違いを捨象した形で「まあ」と表記する。なお、品詞論的な区別（感動詞なのか副詞なのかフィラーなのか）は問題にしないこととする。
- *2 用例は大工原（2010）による。「まあ」の表記もそれに従う。
- *3 例えば山根（2002）によるフィラーの機能的分類を見ると、談話展開に関わる機能、情報処理に関わる機能、対人配慮的な機能と分類されており、異なるレベルにまたがった分析となっているため、本質の部分が見えにくくなっているきらいがある。
- *4 「演技性」という用語は森山（1989）によるが、定延・田窪（1995）、富樫（2004）でも同様の概念を提案している。
- *5 これらの説の問題点は熊切（2022）において詳細に指摘されているので参照してもらいたい。
- *6 連鎖感動詞の定義については劉（2021）を参照。
- *7 富樫（2002）でも「計算処理過程の想定の変り」という同様の指摘をしている。

- *8 高木・森田 (2022) によれば、(15) の状況において「20名」の内、料金を払った参加者は「19名」であるという。となると、参加者は「19名」か「20名」という確定できない部分があることになる。その意味では「20名」という情報に不完全さが残っていると捉えることもできる。
- *9 可能性としては、「右かな」といった表現によって「右」という情報そのものに不完全さが残ることを示すことはできる。
- *10 ただ、大工原 (2010) においては「こだわらない」「切り捨てる」「含意せず」といった複数の表現で説明している。それらが同一の概念なのかどうか微妙な問題を残している。
- *11 姚 (2023) は「あらまあ」全体で一語化が進んでいるとも述べている。

参考文献 (本文内で言及したもの)

- 芦野文武 (2021) 「日本語の談話標識「まあ」の分析」『藝文研究』Vol.121, No.2, pp.128-142, 慶應義塾大学藝文学会。
- 伊藤翼斗 (2014) 「日本語の発話冒頭における言語要素の研究 —相互行為から見る冒頭要素の順序—」大阪大学博士学位論文。
- 加藤豊二 (1999) 「談話標識「まあ」についての一考察」『日本語学・日本語教育論集』6, pp.21-36, 名古屋学院大学留学生別科。
- 川上恭子 (1993) 「談話における「まあ」の用法と機能 (一) —応答型用法の分類—」『園田国文』14, pp.69-78, 園田学園女子短期大学国文学会。
- 川上恭子 (1994) 「談話における「まあ」の用法と機能 (二) —展開型用法の分類—」『園田国文』15, pp.69-79, 園田学園女子短期大学国文学会。
- 川田拓也 (2010) 「日本語フィラーの音声形式とその特徴について —聞き手とのインタラクションの程度を指標として—」京都大学博士学位論文。
- 魏春娥 (2016) 「談話におけるフィラー待遇の研究 —「ま (一)」と「なんか」について—」山口大学博士学位論文。
- 金聖実 (2017) 「日本語と韓国語のフィラーの対照研究 —「まあ」と「뭐」を中心に—」『さいたま言語研究』1, pp.40-50, さいたま言語研究会。
- 熊切拓 (2022) 「プロセスの制止・転換という観点からみた「まあ」の意味」『東京大学言語学論集』44, pp.63-79, 東京大学大学院人文社会系研究科言語学研究室。
- 小出慶一 (2009) 「現代日本語の意味・用法の広がりに関する記述的研究 —多機能化、フィラー、フィラー化—」『日本アジア研究』6, pp.1-37, 埼玉大学大学院文化科学研究科。
- 定延利之・田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構 —心的操作標識「ええ」と「あの (一)」—」『言語研究』108, pp.74-93, 日本言語学会。
- 大工原勇人 (2010) 「日本語教育におけるフィラーの指導のための基礎的研究 —フィラーの定義と個々の形式の使い分けについて—」神戸大学博士学位論文。
- 高木智世・森田笑 (2022) 「問題性への志向を示すメタ相互行為的スタンス標識としての「まあ」」『社会言語科学』Vol.24, No.2, pp.67-82, 社会言語科学会。
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」, 音声文法研究会 (編) 『文法と音声』, pp.257-279, くろしお出版。

- 富樫純一（2002）「談話標識「まあ」について」『筑波日本語研究』7, pp.15-31, 筑波大学文芸・言語研究科.
- 富樫純一（2004）「日本語談話標識の機能」筑波大学博士学位論文.
- 富阪容子（2002）「断定回避のディスコースマーカー」『言語と文化』6, pp.103-115, 甲南大学国際言語文化センター.
- FUKADA-KARLIN Atsuko (2002) Functions of the Attitudinal Discourse Marker *maa* in Japanese Conversation. In Patricia M. Clancy (ed.) *Japanese/Korean Linguistics*, Vol.11, pp.53-66, California: CSLI.
- 森山卓郎（1989）「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1, pp.63-88, 大阪大学文学部日本学科（言語系）.
- 柳澤浩哉・馮文彦（2021）「「まあ」の意味と機能 —出現条件から考える—」『広島大学大学院人間社会科学研究科紀要 教育学研究』2, pp.232-241, 広島大学大学院人間社会科学研究科.
- 山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版.
- 姚瑤（2023）「感動詞の共起について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』68, pp.137-150, 早稲田大学大学院文学研究科.
- 劉伝霞（2021）「自然会話における二連鎖感動詞類に関する研究」山口大学博士学位論文.